

「情動的アプローチによる」 デス・エデュケーションプログラムの効果研究 —死別経験・死への関心との関連—

“Live now !” : the effects of death-educational program.

戸田 恵美子
跡見学園女子大学心理教育相談所

宮崎 圭子
跡見学園女子大学

【問題と目的】

近年、日本において特に、医療や看護分野、学校教育の中で、死をタブー視せず積極的にテーマとするデス・エデュケーションへの関心が高まってきている。「デス・エデュケーション」とは、積極的に死について学ぶだけではなく、人の命が限りあるものであるということを前提にした教育プログラムのことをいう（赤澤・辻本，2003）。現代社会においても核家族化の進行や病院死の増加などで、死を直接的に体験する機会が減少している。また死に関する経験や認識の不足が指摘されている（Deeken, 1986）。このような現状の中で日常生活で死について真剣に考える機会を掴めずにいることが問題としてあげられている。

デス・エデュケーションは大きく分けて二つある。一つは、「死に直面した人」の死への不安を軽減するためのデス・エデュケーションである。二つ目は、健常者に対して死を見つめ今生きていることを感じさせるものがある。

一方、サイコエデュケーションとは1905年に医師であるPratt, J. が外来の肺病患者に活用し始めたと言われている（McWhirter, 1905）。現在は、臨床フ

レームでは解決できなくなった個々人の心理的かつ多様な問題に対処する教育フレーム（心理的なスキルを教授することに焦点を当てる）からの広い意味でのカウンセリングのアプローチである（岡林，1997）。すなわち、日常生活の中で出会う様々な問題を治療的に教育する、問題がおこること自体を予防し、さらに個人、社会人として成長を促進する発達の視点をも内包するものである。サイコエデュケーションは、カウンセリング領域・グループワークの中で、非常に重要な部分を占めるようになってきている（Furr, 2000）。デス・エデュケーションもサイコエデュケーションの枠組みで構成可能である。

また近年、ポジティブ心理学（positive psychology）が注目を集めている（石川・宮崎，2012）。ポジティブ心理学とは、非健常者はもとより、すべての人々が生きがいや仕事のやりがい、充実感を得るためには何が必要かを統計とデータによって実証していく科学である。すなわち、すべての人々により良き人生をもたらすことがその目標となる（Seligman, 1998）。上述したようにデス・エデュケーションは、死に直面した人のためのもので、一般に死をみつめることで生きることを積極的に考えさせ

る二種類のものがある。とくに、後者のデス・エデュケーションにはポジティブ心理学と類似の理念がみられる。ポジティブ心理学の視点で、誰もがいずれはくる死を「今を生きること」につなげられるようなデス・エデュケーションは社会からのニーズが非常に高いと考える。

一方、成瀬（1999）は適度なレベルのイメージを適切に表出し体感することで現実性が高まると主張している。先述したDeeken（1986）の遺言書を書くといったプログラムは認知的アプローチの要素が濃い。デス・エデュケーションは教育的アプローチであるため、認知的要素の強いプログラムが多い。このことは赤澤・辻本（2003）、石田（2008）らの先行研究からも読みとれる。しかしながら、成瀬（1999）が指摘するように適度なレベルのイメージを表出させ体感させることは現実性を高める。イメージ表出、つまり情動的アプローチの要素が強いデス・エデュケーションプログラムの構築は意義のあるものと考えられる。またさらに、デス・エデュケーションを受ける側、参加者の死別体験、死への関心が何らかの影響を及ぼすということはないだろうか。

以上より本研究の目的を以下のように設定した。

1. 情動的アプローチを主にしたデス・エデュケーションプログラムを構築し、その効果を検討すること。
2. 上記のデス・エデュケーションにおいてグループ参加者の「死別体験の有無」、「死別の関心」が、どのように影響するかを検討すること。

【方法】

1. 実施時期：2012年7月上旬～11月上旬
2. 対象者：関東圏内のX大学学部女子大生3年生12名、4年生19名
3. 用具：スクリーン、プロジェクター、PC、色鉛筆（12色）人数分、質問紙、視聴覚資料、クリップ、9マスの画用紙（A3サイズ人数分）
4. 質問紙内容
 - 1) フェイスシート：①所属 ②家族の同居の有無 ③兄弟（姉妹）の有無と被験者が第何子か ④祖父母の同居の有無 ⑤ペットの有無とその種類 ⑥つらい死別経験の有無 ⑦死への関心について（1. ある 2. どちらかといえば関心がある 3. どちらかといえば関心がない 4. ない）に関しての質問から構成した。
 - 2) 時間イメージ尺度：時間イメージ尺度は、（都筑，1993）が開発したものである。現在イメージ、過去イメージ、未来イメージから構成されており、各イメージの尺度は20項目の形容詞対からなる（Table.1）。質問紙では、「あなた自身の現在をイメージした場合、次の各対のどこに最もよく当てはまりますか。」（過去イメージ、未来イメージも同様の指示をおこなう）という指示で7段階評定するよう求めた。それぞれ20項目からなる現在、過去、未来、の合計点を20で除したものを下位尺度得点とした。また、時間イメージに関しては3つの下位尺度計60項目、60の合計点を60で除したものを下位尺度得点とした。
5. 実施したデス・エデュケーションプログラムの内容

Table.1 時間イメージ尺度の下位尺度
(過去、現在、未来)の質問項目

1	楽しくない	-	楽しい
2	空虚な	-	満ち足りた
3	恐ろしい	-	すばらしい
4	魅力のない	-	魅力のある
5	冷たい	-	あたたかい
6	暗い	-	明るい
7	希望のない	-	希望のある
8	遅い	-	速い
9	困難な	-	容易な
10	遠い	-	近い
11	重要でない	-	重要な
12	短い	-	長い
13	小さい	-	大きい
14	悪い	-	良い
15	単調な	-	変化に富んだ
16	あいまいな	-	はっきりした
17	不安定な	-	安定な
18	とじた	-	あけはなした
19	活気のない	-	生き生きした
20	受け身のな	-	能動的な

(プログラムの内容はFig.1を参照)。プログラムはFurr (2000) のサイコエデュケーションの「6ステップモデル」をもとに次のように作成した。

- ←実験者の自己紹介と簡単なプログラムの説明 (約5分)
- ←プリ質問紙 (約15分)
- ←ワーク1 (約15分)
「あと半年の命」と宣告されたらたのことを記述
- ←ワーク2 (約10分)
「葉っぱのフレディ」朗読
- ←ワーク3「描画」(約20分)
9分割統合絵画法の教示
9分割統合絵画法の実施
- ←実験者のレクチャー (約5分)
- ↓←ポスト質問紙 (約15分)

Fig.1 本研究のデス・エデュケーションプログラム

ステップ1：目的の設定—死を身近に体験することのあまりない現代の青年にデス・エデュケーションを試みる

ステップ2：ゴールの決定—「死を見つめることから今を生きる」感覚を体験させる

ステップ3：目標の設定—時間イメージ(現在イメージ、過去イメージ、未来イメージ)をポジティブに変容させる

ステップ4：内容の選択—認知的なアプローチをウォーミングアップとした情動的アプローチを主体とするプログラム

ステップ5：エクササイズのデザイン

1) 「あと半年の命」ワーク1

2) 「葉っぱのフレディ」ワーク2

3) 「9分割統合絵画法(描画)」ワーク3

ステップ6：評価—時間イメージ尺度、デス・エデュケーション後におこなった自由記述による感想

ステップ5の詳細を以下に記す

1) 「あと半年の命」：ワーク1のデザイン

ワーク1の主要な機能はウォーミングアップである。ワーク1の認知的アプローチはDeeken (1986) のおこなった死の準備教育にあげられているものをもとにアレンジしたものである。Deeken (1986) は死の準備教育とは「単なる知識の伝達であってはならない。学生が死に目を向け、死について自ら進んで思考するよう仕向けることが大切である」ことを指摘している。Deeken (1986) は大学生を対象に講義の

中で2つの小論文を書く課題を出している。1つ目は「もし、あと半年の命しかなかったら残された時間をどのように過ごすか」、2つ目は「別れの手紙」を書くということを行なっている。本ワークではDeekenのものを元に改編し作成した。

ワーク1

「あと半年の命」と宣告された。
「やりたいこと」、「一番したいこと」
を3つ記述してもらおう。

教示：「あと半年の命である」と言われました。そうなったことを思い浮かべて下さい。「あなたが一番したいこと」「やりたいこと」を3つ書いて下さい。何でも結構です。どうしても思い浮かばない人は、「思いつきません」と書いて下さい。

2) 「葉っぱのフレディ」：ワーク2のデザイン

ワーク2では、死は誰にでも訪れるものである。「生きるということ」、「死ぬということ」、「命とはどういうことなのか」を体感させるデザインとしたい。先述したように成瀬(1999)は、適度なレベルのイメージを適切に体感させることは現実性を高めると指摘している。第1章の問題で指摘したように伊藤・松村・松原(2005)は「葉っぱのフレディ」を教材に、命を考えるということをテーマにデス・エデュケーションをおこなっている。対象は将来、保育士になりたいと考えている学生に実施している。結果は、3割強の学生は身近な人の死に立ち会ったことがなく、「実感でき

ない。想像できない。分からない。悲しい。辛い。怖い。」と漠然とした感じ方であった。しかし、「葉っぱのフレディ」を教材として取り入れエデュケーションした後、「命は永遠、死は終わりではなく変化する。命の大切さを知る。」など学生に明らかに変化がみられた。さらに上田・宮下(2004)も「葉っぱのフレディ」を使ってデス・エデュケーションを行なっている。その結果、多かった回答内容として「人間は、大自然の大きな流れの一部として、何らかの形で生まれ変わる」というものが挙げられていた。上述のように「葉っぱのフレディ」は、適度なレベルのイメージを感じさせるための本ワークのテーマと合致している。以上のことより本研究のデス・エデュケーションの教材において「葉っぱのフレディ」を採用することとした。

ワーク2

「葉っぱのフレディ」の絵本を採用する。

教示：葉っぱのフレディを聴いて下さい。

3) 9分割統合絵画法(描画)：ワーク3のデザイン

9分割統合絵画法は、森谷(1987)が考案した療法であり、この技法は金剛界曼荼羅からヒントを得ている。絵画空間を構造化することによってより複雑な情報処理を可能にしたものである。1枚の画用紙を3×3の9個に分割し、1つのテーマに対し様々なイメージをその9カ所に描いていく方法である。とらえどころのない多様なイメージをより全体的に把握する方法とし

て有効であり、その多様なイメージを損なうことなく1枚の画用紙に表現できる。

森谷 (1995, pp.70) は、『たとえば「私」という存在は、実に多様性を持っており私は大学の教員であり国家公務員でもある。

また、同時に一人の息子でもある。私の興味や趣味は読書や音楽鑑賞であり、テニスや釣りでもある。このような一筋縄ではいかない「私」という存在を一つの絵にするのであれば、白紙の画面では描きにくいと感じ、もし画面をマンダラのように9分割にすると描きやすくなるのではないかと直感的に感じ考案した』と述べている。この9分割統合絵画法は、絵画法の中では比較的構成的な枠組みを持った技法である (Fig.2)。ワーク3は、森谷 (1987) が開発した9分割の描画療法を元に宮崎 (2004) がアレンジしたものを採用した。「過去・現在・未来」というテーマで描画をするというワークである。「葉っぱのフレディ」の朗読によって、産み出されたイメージを絵に表出することを目的とした情動的アプローチである。

ワーク3

「描画」9分割統合絵画法

9分割統合絵画法の教示：パワーポイントと配布した資料を参照しながら説明する。

①今、感じているあなたの「過去」、「現在」、「未来」を描いてみて下さい。絵、記号 (例えば：♪, ♥)、文字、色だけ、数字だけでも結構です。②どこから描きはじめても結構です。③但し、時間軸が「矢

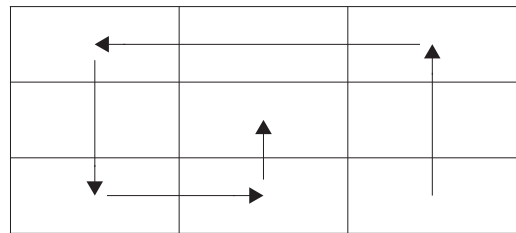
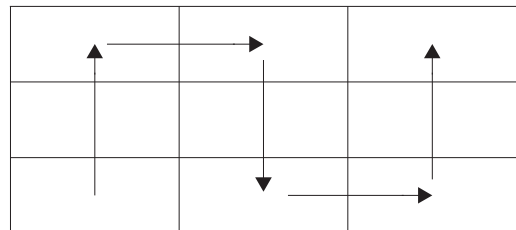


Fig.2 9分割統合絵画法 (森谷, 1987)



(過去の欄) (現在の欄) (未来の欄)
Fig.3 本研究で使用した9分割統合絵画法
(宮崎, 2004)

印」(Fig.3参照)の方向になるようにして下さい。お配りした画用紙の左下→左上→中央上→中央下→右下→右上が、皆さんの過去(左下)→現在→未来となるように皆さんが持っているイメージを思い浮かぶまま描いて下さい。④最低3マスは埋めて下さい。(本実験での描画はFig.7、Fig.8を参照)

6. 予備実験

実験の目的は以下とする。

①デス・エデュケーションの時間配分と、設定した時間内に終了可能であるかの検討、②ワークの適切性の検討、③用具の適切性の検討

1) 時期：2012年7月上旬、2) 対象者：関東圏内のY大学院の修士1年生16名。

但し、「葉っぱのフレディ」は、You Tube (http://www.youtube.com/watch?v=sf4FkbT5_xk)の動画を採用した。(この動画の採用に関しては作者の許可を得て採用している)。

- ←実験者の自己紹介と簡単なプログラムの説明 (約5分)
- ←プリ質問紙 (約15分)
- ←ワーク1 (約15分)
 - 「あと半年の命」と宣告されたらのごとを記述
- ←ワーク2 (約10分)
 - 「葉っぱのフレディ」動画
- ←ワーク3「描画」(約20分)
 - 9分割統合絵画法の教示
 - 9分割統合絵画法の実施
- ←実験者のレクチャー (約5分)
- ▼ ←ポスト質問紙 (約15分)

Fig.4 予備実験のデス・エデュケーションプログラム

3) 結果：デス・エデュケーションプログラム実施の結果、どのイメージにも有意な差はみられなかった。

4) 考察：ワーク1に関しては、多くの参加者がとどこおりなく実施できたが、ワーク2において次のような問題点が観察された。動画の容量が重かったせいか、しばしば画像がフリーズしてしまう状況に陥った。そのため緊張感が消失する参加者も散見された。

以上より本実験では動画でなく肉声の朗読にきりかえおこなうこととした。

【本実験の結果】

1. 本プログラムの効果検討

本研究で作成したプログラムに関して、実施前後で過去イメージ、現在イメージ、未来イメージ、時間イメージを対応のあるt検定で検討した。(Table 2)

プログラム実施の結果、1%水準で時間イメージと未来イメージがポジティブな方に変化し、さらに0.1%水準で現在イメージもポジティブな方に変化した。

2. 死別経験の有無における差の検討

独立変数を死別の経験(1.有、2.無)として二要因分散分析(2×2の混合計画)を実施した。(Table 3)

すべてにおいて交互作用に有意差は検出されなかった。また、死別の経験がある群のほうが死別の経験がない群に比べ未来イメージにおいて0.1%水準で有意に高かったことが明らかとなった。

3. 死への関心における差の検討

死への関心の「ある」から「なし」の4件法で回答を求めた。その結果、「ない」に回答したのは0人であった。よって独立変数を死への関心の(1.ある2.どちらかといえは関心がある3.どちらかといえは関心がない4.ない)として二要因分散分析(4×2)の混合計画)を実施した。(Table 4)

すべてにおいて交互作用、また被験者間要因の有意な差は検出されなかった。

Table.2 プリ質問紙とポスト質問紙の比較

	プリ			ポスト		t値
	M	SD		M	SD	
現在イメージ	4.67	0.86	<<<	5.18	0.85	-4.11
過去イメージ	4.14	1.11	n.s.	4.26	1.03	-0.79
未来イメージ	5.00	0.92	<<	5.35	0.84	-3.32
時間イメージ	4.58	0.74	<<	4.89	0.68	-3.38

(<<< ; p<.01, <<<< ; p.001)

Table.3 死別の経験の有無における各時間イメージの変化
(上段：平均値、下段：標準偏差)

		pre	post	F値		
現在イメージ						
死別の経験	ある	4.79	5.26	被験者内要因	F(1, 26) = 16.2	**
		0.60	0.84	被験者間要因	F(1, 26) = 0.70	n.s.
死別の経験	なし	4.49	5.05	交互作用	F(1, 26) = 0.13	n.s.
		1.18	0.87			
過去イメージ						
死別の経験	ある	4.26	4.37	被験者内要因	F(1, 25) = 0.60	n.s.
		1.08	0.99	被験者間要因	F(1, 25) = 0.46	n.s.
死別の経験	なし	3.97	4.12	交互作用	F(1, 25) = 0.02	n.s.
		1.19	1.11			
未来イメージ						
死別の経験	ある	5.26	5.57	被験者内要因	F(1, 26) = 10.84	**
		0.84	0.82	被験者間要因	F(1, 26) = 3.86	***
死別の経験	なし	4.60	5.00	交互作用	F(1, 26) = 0.21	n.s.
		0.95	0.79			

(** ; p<.01, *** ; p<0.001)

Table.4 死への関心の影響における各時間イメージの変化
(上段：平均値、下段：標準偏差)

		pre	post	F値		
現在イメージ						
死への関心	ある	4.66	5.1	被験者内要因	F(1, 25) = 8.54	**
		0.72	0.9	被験者間要因	F(1, 25) = 0.49	n.s.
死への関心	どちらかと言えばある	4.65	5.22	交互作用	F(2, 25) = 0.51	n.s.
		1.14	0.75			
死への関心	どちらかと言えない	5.15	6.25			
		(n=1)	(n=1)			
過去イメージ						
死への関心	ある	4.20	4.24	被験者内要因	F(1, 25) = 0.61	n.s.
		1.10	1.06	被験者間要因	F(1, 25) = 0.46	n.s.
死への関心	どちらかと言えばある	3.93	4.19	交互作用	F(1, 25) = 0.02	n.s.
		1.16	1.03			
死への関心	どちらかと言えない	5.30	5.4			
		(n=1)	(n=1)			
未来イメージ						
死への関心	ある	5.06	5.29	被験者内要因	F(1, 25) = 6.21	*
		0.86	0.82	被験者間要因	F(2, 25) = 0.97	n.s.
死への関心	どちらかと言えばある	4.80	5.3	交互作用	F(2, 25) = 1.03	n.s.
		1.05	0.86			
死への関心	どちらかと言えない	5.90	6.70			
		(n=1)	(n=1)			

(* : p<.05, ** ; p<.01)

【考察】

1. 本プログラム効果の検討

現在イメージと未来イメージ、時間イメージにおいて有意にポジティブな変化が確認できた。現在イメージについては、「死を見つめることで、今を生きている」ということを、未来イメージについては「死を見つめることによって未来を生きる」ということを考えるきっかけができたのではないかと。Deeken (1986) は、「死を意識し、自分自身の生きる時間が限られていることを自覚する時、かけがえのない人生の貴重さを改めて認識し、残された時間をより豊かにまた健やかに生きるべく努めるようになる」と主張する。そういう意味で、今回のデス・エデュケーションはよりよく生きるための命の教育、ライフエデュケーションとしての効果があったと言えるであろう。

また、デス・エデュケーションの各ワークに関して、死を直接的に体験する機会が減少し、喪失体験の少ない現代社会において今回のような情動・イメージに焦点をあてたデス・エデュケーションは学生にとって、喪失・再生シミュレーションのような役割を果たしたのではないかと考えられる。

本研究における予備実験では、大学院生に「葉っぱのフレディ」を映像で流すワークをおこなった。「ワーク1」と「ワーク3」においては、多くの参加者がとどこおりなく実施できたものの「葉っぱのフレディ」については次のような問題点が散見された。動画の容量が重たかったせいか、映像提示中しばしばフリーズしてしまう状況に陥った。そのため参加者の集中力が消失

するという事に繋がり、結果どのイメージにおいても有意差が検証されなかったのではないかと考えられる。そのため本実験では、「葉っぱのフレディ」を朗読に切り替えておこなった。その結果、ポジティブな方へ変化が確認された。このことに関して、本研究では各ワークにおいて量的な測定をおこなっていないため拡大解釈を慎まなければならないが、「葉っぱのフレディ」を映像で提示するよりも、肉声の朗読でおこなったほうが参加者の感情に刺激をあたえることが可能になってポジティブな影響を与えられたのではないだろうかと考える。

上田・宮下 (2004) は、「葉っぱのフレディ」を教材にした「人の成長発達・加齢の課程」についての研究をおこなった。実験では、①葉っぱのフレディをフロイトとエリクソンのライフステージ8段階に区切る作業、②自己と他者の観点でステージを8段階に命名する作業をおこなった。その結果、ライフステージの最終段階の命名に参加者の約30%が「輪廻転生」という記述をしていた。これはBuscagliaのいう命のつながりや未来への希望ではなく、他の記載との関連でみると「何か別のものに生まれ変わる」という考えであることを述べている (上田・宮下, 2004)。

また諸富 (2002) のおこなった研究で、若い学生と話していると多くが「人間は、大自然の大きな流れの一部として、何らかの形で生まれ変わる」ということを、当然のように考えていることが分かるということ述べている。このことは、今回の本研究においても参加者が学生であるため、諸富の指摘する同様な考えをもっている者が

多かったのではないだろうか。そのため、過去イメージについて有意差が検出されなかったのではないだろうか。有意差がなかったことに対し拡大解釈することは慎まなければならないが、本研究のデス・エデュケーションは、そもそも未来の死を見つめ今を生きることを疑似体験してもらうプログラムであった。そのため過去イメージにコミットするプログラム内容ではない。それが過去イメージに有意差がみられなかった理由の一つだったかもしれない。この検証は今後の課題である。また、さらに次のようなことも考えることは出来ないか、諸富の指摘する「死ねばすべて終わる。心とは、脳という物質が映し出しているにすぎない」と言った虚無的な考えが学生にはあるのではないかという。本研究においても、参加者に何かしらの虚無感があった可能性は否めない。これに関しても今後の検討課題と言える。

2. 「死別経験」「死への関心」について

今回の研究結果では、デス・エデュケーションに関係なく死別経験がある人のほうがない人に比べ未来イメージがポジティブに高かったことが明らかとなった。先述したようにDeeken (1986) は、現代社会の問題点として死に関する経験や認識の不足を指摘している。今回の研究結果では、死別を直接的に経験した人のほうが未来をよりポジティブに感じている。一般的には死別経験というのはネガティブなイメージを想像されることが多い。しかしながら、今回の結果からは逆の結果になったことは興味深い。平井ら (2000) は、日本人の死生観の尺度を作成した。抽出された因子のうち、「死への恐怖・不安」という否

定的側面も抽出されているものの、「人生における目的意識」という肯定的側面も同時に抽出された。この研究結果は、本研究とも一致する。さらに、看護学生へのデス・エデュケーションの効果も報告されている。実施後、生命の誕生は貴いと回答した看護学生が増加した。つまり、平井ら (2000)、石田 (2008)、本研究が明らかにしているように死は否定的側面だけではなく肯定的側面も合わせ持っているということがいえるであろう。

また、「死への関心」に関しては、関心ある、なしに関わらず、現在イメージ、未来イメージがよりポジティブな方に変容した。この事は本プログラムの有効性を現わしていると言えよう。

謝辞

本研究は多くの方々のご協力を得て、このたび完成させることができました。この場をお借りいたしましてお礼を申し上げます。

執筆にあたり、ご指導や貴重なアドバイスをいただきました先生方、また本研究のために貴重な時間を割きご協力いただきました学生参加者の皆さま、実験のプログラムを実施する際にお手伝いをして頂いた方々にも、心より感謝の気持ちとお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

【引用文献】

赤澤正人・辻本寛和 (2003). デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する影響 試作プログラムによる介入実験を通して 臨床死生学年報. No. 8, 2

- 14.
- 石川マスノ・宮崎圭子 (2012). 「親しい人からの感謝行動に対する心理的影響」レジリエンシーとの関係も含めて 跡見学園女子大学付属心理教育相談所紀要, **8**, 51-60
- 石田美加 (2008). 看護学生の死生観構築を目指した「デス・エデュケーション(生と死の教育)」の試み 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究No.10, 217-231.
- 伊藤純子・松村万里子・松原靖子 (2005). 命を考える ―絵本「葉っぱのフレディ」を題材として―聖和学園短期大学紀要, No. 42, 87-94.
- 上田 衛・宮下栄子 (2004). 絵本を教材にした授業の試み: 「葉っぱのフレディ」を活用してエイジングを考える ―医療福祉系専門職養成における科目設定と科目間の整合性について― 鶴見大学紀要, No. 41, 7-16.
- 岡林春雄 (1997) 心理教育―psychoeducation―金子書房
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48
- 成瀬悟策 (1999). 自己コントロール法 誠信書房
- 宮崎圭子 (2004). 9分割統合絵画法のサイコエデュケーショナル・グループへの応用―就労学生達への援助アプローチ―産業カウンセリング研究, **7**, 17-23.
- 森谷寛之 (1987). 毎回, 9分割統合絵画法を描き続けた登校拒否女子中学生の事例 愛知医科大学基礎科学科紀要, **14**, pp 1-41.
- 諸富祥彦 (2002) 生きがい発見の心理学―「自分」を生きる「運命」を生きる―日本放送出版協会
- Alfons Deeken (1986). 死を教える―叢書 死への準備教育―メヂカルフレンド社
- Furr, S.R. (2000). Structuring the group experience : A format for designing psychoeducational groups. *Journal for specialists in group work*, **25**, 29-49.
- McWhirter, J.J. (1995). 学生のためのグループカウンセリング―心理教育的グループに関する最近の理論と傾向― (Cusumano, J.通訳)



Fig.7 事例1 (9分割統合絵画法)

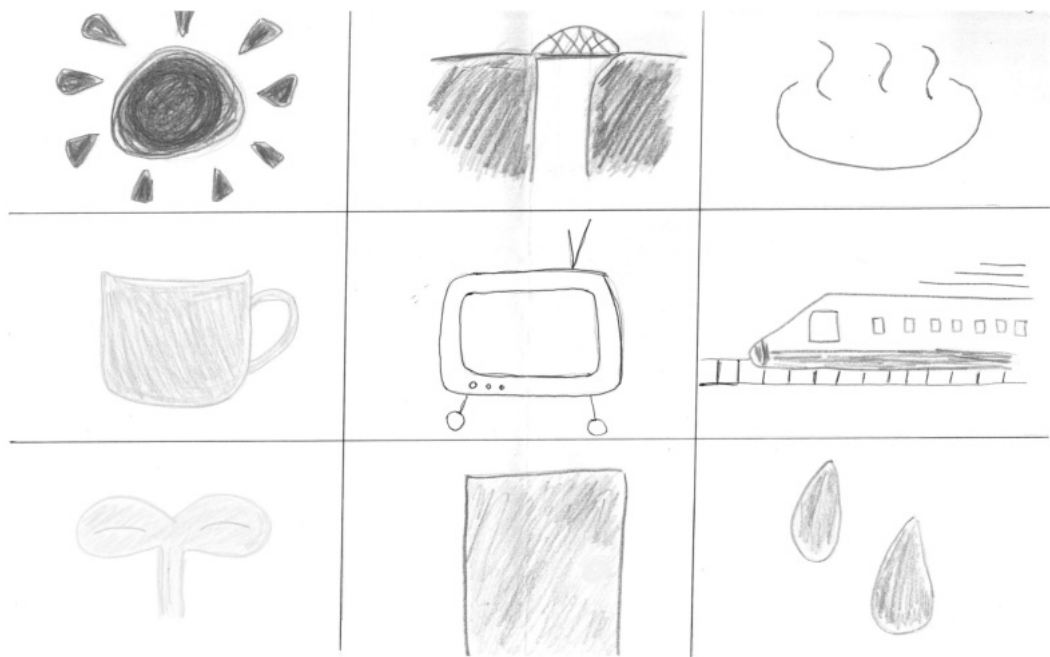


Fig.8 事例2 (9分割統合絵画法)